

東京女子大学レーモンド建築の記録

『喪われたレーモンド建築』

2006年6月、東京女子大学の東寮と体育館の解体計画が同窓会総会にて公表された。1924年に竣工した2棟の建物は、A・レーモンドによる9棟の建築群の中でも、チェコ・キュビズムが表現された建築的価値が高い上、新渡戸稲造、安井てつ、A・Kシャワーの「国内外から志を立てて集う学生に、祈りと思索と学習の場を美しい形で与えたい」とする崇高な建学精神の結晶ともいえる。2006年7月、同校卒業生有志による「東京女子大学レーモンド建築 東寮・体育館を活かす会」が発足し、1万人を超える署名を集めるなど保存活動を展開してきたが、2棟の解体は防げなかった。時系列に沿った保存活動の全記録をまとめた本書から、「なぜ解体計画が出たのか」という素朴な疑問から保存活動が始まり、「なぜ、解体を防ぐことができなかったのか」と今なお続く喪失感が伝わってくる。



本書帯に記された同校卒業生の作家・永井路子の言葉が響く。「ホンモノは『残さなくてよかった』ことは1度もなく、『残してよかった』か『残せばよかった』しかない」。

定価2,400円(税別)、工作舎